

男失格の戦傷者となつて

京都府 神 森 鑽太郎

私の兵隊検査は昭和十四（一九三九）年でした。瘦せていましたので「少し細い」ということで第二乙種合格で第一補充兵編入でした。

昭和十五年五月一日、京都輜重兵第十六連隊に応召、入隊、同年七月末まで厳しい初年兵教育を受けました。

八月一日、奈良歩兵第三十八連隊に転属、八月七日、宇品から乗船して中国へ向かい、中支派遣軍第三百三十八連隊第一大隊の大隊本部の小行李班に転属しました。ここでは古兵は皆特務兵ばかりで、その中へたった二人が入隊したのですが、昭和十七年七月頃、入院のため後送されるまで、私は初年兵でした。

九月十八日、初めての戦闘に参加しました。こ

れは友軍が占領した山へ弾薬を二個持つて運ぶ任務で、何回か繰返し運びました。これには苦力のリーダーがかなり日本軍に協力的だったので、無事任務を果たし、隊長に喜ばれました。

昭和十六年十二月六日には、漢口を通過して武漢西北西方の約一五〇キロの付近の警備に当たっていたのですが、かの浙贛作戦参加のため、再び南南東の漢口に向かって移動することとなり、その行軍中、車を引いたり駄馬を連れたりして帰ってくる。何日目かの小休止の時、突然敵の攻撃を受けました。

我らを護衛していた歩兵たちが勇敢にこれに立ち向かつて応戦中、私は速やかに安全な場所へ避難するため飛び乗った駄馬の駄鞍のどこかに強く打ちつけたのか、股間を掠めて通り過ぎた流れ弾のせいだったか、陰囊に小さなかすり傷ができて血が滲んでいました。

大した痛みでもなかったので、余り気にもせず、

手持ちのメンソレータムなんかつけて、チリ紙を当てる処理完了としていたのです。しかし移動中のためか、あるいは車で先行していたか、軍医どころか衛生兵にも会うことができず、四十日ほど経ってやっと軍医殿の診断を受けた時には、軍医殿も目を背けられるほど酷く化膿していたのでした。

当然のことながら性病を疑われ、血液その他の必要な検体を揃えて検査に出して貰いましたが、いずれも悪い症状は認められず、入室治療者となつて、軍医殿の手厚い治療を受けていました。

この軍医殿には転出(内地帰還)の命令が出て、次の軍医殿に引き続き申し送りを受けたのですが、他の軍医殿の治療を受けるのは何となく気が進みませんでしたので、申し出て入院することとなり、七月半ば、もう一人の負傷者と一緒に、数人の護送兵に付き添われて、大海のようになったクリークを小舟で、安慶野戦病院大通分院に入院しまし

た。

七日間ほどいて、すぐ本院に転院、ここでは診察を受けることなく、南京陸軍病院に送られました。この病院長・少将閣下の慎重な診察を受け、翌日副院長の大佐殿から「可哀相だが、お前の辜丸は二つとも取って捨てなければならぬ。昨日の診断の結果、院長閣下がそう言われた。覚悟しておれ」と告げられました。告げる大佐殿もお顔のせい、少し曇って見えたようでした。

そして優秀な軍医中尉殿の執刀で、「両辜丸摘出」の手術が行われ、無事成功しました。私はただ、股間のこれまでの不愉快なものがなくなつて、さっぱりするだろうと思っていたのですが……。病院では看護婦をはじめとても親切でした。

『日傷月刊』 昭和十六年五月一日発行六〇六号に

「ある傷痍軍人」和歌山県傷 中 博氏

の記事の中に、次のような一文がある。

夜中病室で一人の患者が、突然声を出して泣き出した。この人も下腹部に被弾、両鞆丸を失った人。受傷の状況は違え、でも私と全く同じ、泣きたくもなる。

「人失格、男失格」子孫を残すことのできる、虫ケラより劣る駄目人間。抜け殻のような形だけの生きる価値さえないふがいない者になってしまった。

このまま生きていていいのか？ 思い悩めば悩むほど泣きたくなってくるのです。この人は特別項症に遇されておられる由。何故か、とにかく、心身ともにすっかり落ち込んでしまつて、特急列車で上海へ、そしてオンボロ貨物船を改造した小さな病院船で内地、広島へ、ぼんやりと還つてきました。

そして終戦の年の十月、たつてと進められて結

婚をしました。これが間違いだつたのです。私の苦労はこれからでした。性行為不能者が妻を娶るなんていうことは、もつてのほかなのでした。

それに気付いたのが、少し遅かつたのです。そして私の生涯の不覚でした。世間知らずの女遊びも知らなかつた若造に性行為の微妙さ、良さ、なぞ想像もできない。学問では四、五十歳頃までは性交可能であるとされていました。それを信じていたが、学説にも個人差があつたのでしょうか。私は駄目であることに気付かされたのは結婚後一カ月余りも過ぎた頃でした。

先の記事の人同様、声を上げて泣きたい思いでした。仕事などに熱中していても、すぐ飽きたり気が変わったり、何事にも根気が続かず、興味も湧かず、我ながら困つた者になつたなあと思つてはいました。

そして妻は五十九歳の秋の初め、あつけなく、この世を去つたのでした。

この傷がせめて手足か体に受けた傷だったら、我が子を抱くこともできたろう、孫をあやすこともできたろう。我が子への愛すら知らぬまま、私は八十五歳の不運の人生を終わろうとしている。

五年前、腰椎の圧迫骨折で歩行が不自由となり、養生の結果、今では、ほんの少し歩けるようにはなったのですが、小用に立つことさえ困難になった時、私は誰の看護を受けることになるのか。私の希望は、動ける間に先祖のもとへ行きたい。永い辛抱への償いとして、それくらいは許されたい、それだけです。

初年兵の思い出

石川県 石田 一郎

① 赤紙再検合格、釜山に渡る

私は赤紙召集の昭和十九（一九四四）年兵の一人です。ポート部での過激な運動のため肋膜炎を患い、第三乙種でした。赤紙では「十月一日、門司集合」と書いてあったので、小学校の村尾先生の親戚の床屋さんへ前日に行って世話になった。翌日小学校で再体格検査がありほとんどが合格でした。

運動場へ通じる廊下を通り、各教室の窓口に古参兵の一人が立っていて、「大」と声をかけられたら各教室の窓口で「大」と言って「大」の衣服を受け取り、運動場で軍服に着替えろということでした。外へ出るとまた古参兵がいて、他の者とそれぞれ適当に交換して頭の大小、ズボンの長短をチャンとせいと言うことでした。しかし日本の軍